# 世界の人とふれあいタイム

## 「ペルーの話」

平成２５年４月２１日実施

今回のスピーカーは、ペルーのリマ出身、日系三世の小倉アナマリアさんです。当協会の語学シリーズでスペイン語の講師もされました。アナマリアさんの祖父母は今から 114 年前の 1899 年（明治 32 年）に、第１回契約移民船でペルーに渡りました。当時は渡航に４９日かかったそうです。この４月、アナマリアさんは、アトランタ経由でペルーから帰国され、飛行時間は僅か１９時間。その便利さと祖父母への感謝の気持ちでいっぱいだったそうです。

アナマリアさん

来日して、最初の印象は「交通」です。人と車が左右に分かれた様子が、まるでロボットみたいに思えたそうです。ペルーでは最近、電車がダウンタウンまで１、２ 本走る程度で、車の利用が多く、ドライバーは交通ルールを守らず、車が蛇のようにすり抜けるため、歩行者は、命懸けだそうです。

他に日本の印象は、「静けさ」です。「こんなに大勢の人が住んでいるのに、何でこんなに静かに過ごせるのかしら」と思ったそうです。ペルーでは、車のクラクションの音が鳴り響き、また、朝は、どの家庭でも、ジューサーの音からはじまり、ニュースや天気予報の情報を得るためのラジオが各部屋から音高く聞こえます。また、ペルーでのうれしいことには、「誰かに会いたいなぁ」といきなり、友人に

電話をかけても「予定があるけど一緒に来る？」と誘ってくれ、友人のつながりの輪が広がります。時間を守らなかったり、約束を忘れることがあったりしても、そのことで、プレッシャに感じることはないそうです。

アナマリアさんの挙式を両親のために、日本で行った際、日本の慣習、「お祝いの半返し」に「ペルーで結婚式をあげればよかった」と後悔したそうです。お中元やお歳暮の習慣もなく、バレンタインデーはプレゼントをお互いに交換しあい、男性からは赤いバラ、女性からは「私のものよ(首を絞める)」という意味で、ネクタイなどをプレゼントするそうです。誕生日や母の日、父の日は、必ず花束か、好きなものを手渡し、母の手料理をいただき、ひと時を一緒に過ごすそうです。

民族音楽を聴きながら、映像でマチュピチュやクスコなどの遺跡、アンデスの踊りと音楽、アマゾン川のサーフィン、週末の風景などを紹介されました。

ペルーの国旗の色はフラミンゴが羽を広げた様を表し、中央に国章のある旗は、政府機関のもので、正式な旗は赤白赤のシンプルなものです。アナマリアさんも、小さい頃から「国旗をとても大事に思う」気持ちが心にインプットされていると語っていました。

〈Q&A〉　アナマリアさんは娘さんから「ローソク」とあだ名をつけられている訳は、ペルーから帰国したばかりは、きらきらしているが、しばらくたつと、まるで、ローソクみたいに火が消えてくるそうです。「生活環境の違いからですか」との質問に、「確かに日本は水も空気もきれいだし、安心して夜中でも歩くことができますが、日本の家はシーンとしている。何故か、あの騒々しい、ペルーへ戻りたくなる、ペルーは近所づきあいが日本より開放的で、笑いがあり、一歩家をでると大勢の人と、おおおしゃべりをします。」と答えて、質問者や参加者からは「日本人が学びたいところですね」との声がきかれました。

「ご自身のアイデンティティについてどうやって乗り越えられたのか」の質問に、「日系人ということで、２つの祖国の間で悩んだ時期もありました。日本に帰れず、亡くなった祖父はかつて、孫のために『晴美』という日本名を用意してくれていたほど、日本の美しい快晴の空に生涯恋焦がれたことを思うと、私が祖父の代わりにこの空を見続けなければいけないと思い、乗り越えられました。」と返答されていました。

先住民族と言語についての質問に、45%もいるインディオはケチュア語や、アイマラ語を話し、主な学校教育では公用語のスペイン語で勉強します。他には、アメリカ系、ドイツ系、フランス系、日系の学校に子供を入学させる親もいるそうです。「クスコの音楽」の質問には、日本でいう演歌と同様とのことでした。

世界の人とふれあいタイム委員長　生山　龍哉

### … 日本語デビューのエピソード …

アナマリアさんは 13 歳のとき、思い立って、内緒で日本語の古い本で勉強を始めたそうです。いよいよ、親族、友人、家族が大勢集まった席で、「父さん、砂糖取ってくれ」と言い出したとき、みんなに大笑いされ、「二度と、日本語を話さない」と誓ったという…日本語デビューの苦い思い出をユーモアたっぷりに語ってくれました。

※次回：2013 年 6 月 30 日(日)、「スリランカの話」を開催しました。内容を次号でご紹介します。